東京新聞　朝夕刊月ぎめ 3,700円（うち消費税274円）1部売り 朝刊120

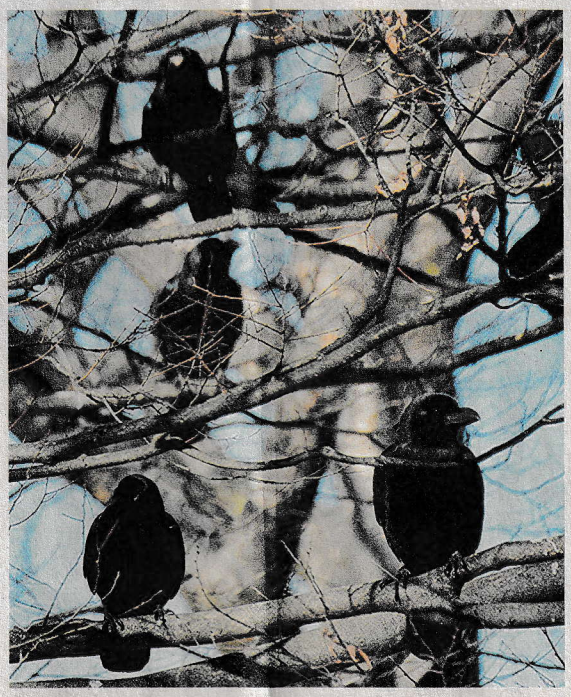
都心カラス激減

2022年（令和4年）
1月25日
火曜日

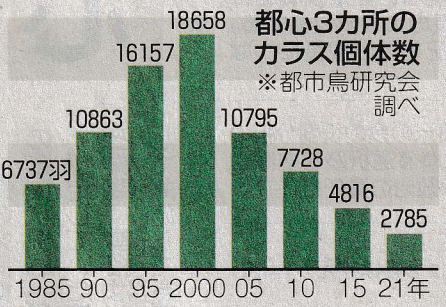
中日新聞東京本社
〒100-8505
東京都千代田区内幸町
二丁目1番4号
TEL 03-6910-2211

21年はピークの7分の1　研究会調査

東京都心に生息するカラスがピーク時の七分の一に減ったことが、都市部の鳥類を調べている「都市鳥研究会」の調査で分かった。カラスがごみを荒らすのを防ぐネットの普及や、カラスを捕食する猛きん類の都市進出、さらに新型コロナウイルスの影響で人々の外食の機会が減り飲食店から出るごみが減ったことも原因とみている。（加藤益丈、写真も）



上木の枝で羽を休めるカラスの群れ　下カラスの撮影をする唐沢孝一さん＝いずれも21日、東京都渋谷区で



鳥類研究者やバードウオッチャーでつくる研究会は一九八五年から五年に一回、都心有数のカラスのねぐらがある豊島岡墓地（文京区）、明治神宮（渋谷区）、国立科学博物館付属自然教育園（港区）の三カ所で、個体数を調べている。

二〇二〇年はコロナ禍のため調査を見送り、昨年十二月十二日に調査員をワクチンを接種した成人に限るなどして六年ぶりに実施した。

確認したカラスは三カ所で計二千七百八十五羽。一五年に行った前回調査より二千羽以上少なく、ピーク時の〇〇年の一万八千六百五十八羽の15％だった。三地点のうち自然教育園は前回の八百四十八羽から二十五羽に激減した。同園では一七年からオオタカの繁殖が確認されており、研究会はカラスが捕食されたり、危険を感じて離れたりして減ったとみている。

明治神宮は千五百八十羽、豊島岡墓地は千百八十羽で、いずれも前回より三割前後減り、調査日にオオタカが目撃さ

コロナ禍追い打ち？　飲食店休業で

う。

調査責任者で都
者の唐沢孝一さ
「以前はオオタカ
の集団に追い払わ
が、最近はカラス
立場が逆転しつつ
話している。

六年前と比べた
コロナ禍でカラス
るごみが減った影
と唐沢さんはみて
後について「新型
感染が収まり、外

事業系のごみ　23区で25％減

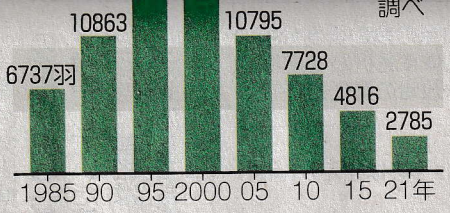
東京二十三区清掃一部事務組合によると、二十三区の店舗やオフィスビルなどから二〇二〇年度に収集された「事業系一般廃棄物」（事業系ごみ）は七十三万トンで、前年度より25％（二十四万トン）減った。近年にない減少幅で、担当者は「新型コロナウイルスの影響で、事業活動が縮小したためだろう」と話している。

事業系ごみは、事業活動でたごみのうち、産業廃棄物以の生ごみや紙くずなど。バブ期の一九八八年度の百二十八トンが最多で、その後、二〇一年度までは九十万トン台から百万トン台の間で増減を繰り返していた。二一年度もコロナ前を幅に下回っている。二一年四

1分の1 研究会調査

コロナ禍追い打ち？ 飲食店休業で「エサ」不足

撮影する唐沢孝一さん＝いずれも21日、東京都渋谷区で



鳥類研究者やバードウオッチャーでつくる研究会は一九八五年から五年に一回、都心有数のカラスのねぐらがある豊島岡墓地（文京区）、明治神宮（渋谷区）、国立科学博物館付属自然教育園（港区）の三カ所で、個体数を調べている。

二〇二〇年はコロナ禍のため調査を見送り、昨年十二月十二日に調査員をワクチンを接種した成人に限るなどして六年ぶりに実施した。

確認したカラスは三カ所で計二千七百八十五羽。一五年に行った前回調査より二千羽以上少なく、ピーク時の〇〇年の一万八千六百五十八羽の15％だった。三地点のうち自然教育園は前回の八百四十八羽から二十五羽に激減した。同園では一七年からオオタカの繁殖が確認されており、研究会はカラスが捕食されたり、危険を感じて離れたりして減ったとみている。

明治神宮は千五百八十羽、豊島岡墓地は千百八十羽で、いずれも前回より三割前後減り、調査日にオオタカが目撃されたという。

調査責任者で都市鳥研究者の唐沢孝一さん（七八）は「以前はオオタカがカラスの集団に追い払われていたが、最近はカラスが減り、立場が逆転しつつある」と話している。

六年前と比べた急減は、コロナ禍でカラスの餌となるごみが減った影響があると唐沢さんはみており、今後について「新型コロナの感染が収まり、外食が盛んになるなどしてごみが増えればカラスも増える。逆に感染の拡大が続くなどして、ごみがさらに減れば、カラスはもっと減るだろう」と予測する。

また「カラスはごみをあさり悪い印象が強いが、ネズミの死骸や害虫を食べており、いなくなると困る面もある。地球に人間の思い通りにならない存在がいることを学ぶ役割も果たしており、ゼロになってほしくない」と話す。

事業系のごみ 23区で25％減

東京二十三区清掃一部事務組合によると、二十三区の店舗やオフィスビルなどから二〇二〇年度に収集された「事業系一般廃棄物」（事業系ごみ）は七十三万トンで、前年度より25％（二十四万トン）減った。近年にない減少幅で、担当者は「新型コロナウイルスの影響で、事業活動が縮小したためだろう」と話している。

事業系ごみは、事業活動で出たごみのうち、産業廃棄物以外の生ごみや紙くずなど。バブル期の一九八八年度の百二十八万トンが最多で、その後、二〇一九年度までは九十万トン台から百十万トン台の間で増減を繰り返していた。二一年度もコロナ前を大幅に下回っている。二一年四～十一月は前年同期比4％（一万八千トン）増の五十一万トンだが、一九年同期比で24％（十五万トン）少ない。

一方、家庭から出る生ごみなどを含む「可燃ごみ」は二〇年度は百七十一万トンで前年度より2％（三万トン）増えた。「巣ごもり需要で家庭のごみが増えた」（同組合の担当者）と話す。